



ヤナカジ (流行病)

朝夕の風が涼しく感じられるようになった今日このごろ、季節は冬へ移り変わろうとしています。この時期は空気が乾燥し、体調を崩す人が多いようです。



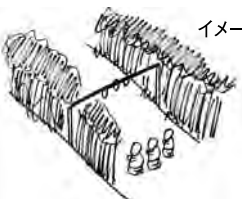
最近では休校措置をとるところもありません。さて、今回は「ヤナカジ(流行病)」、特に天然痘(痘瘡)が流行ったときのお話をしたいと思います。

天然痘とは、ウイルスによって起こる伝染病のひとつです。高熱を発し、体にうみを持った小さなぶつぶつができ、治ってもあとが残るといふ病気です。戦前、沖縄でも何度か天然痘が流行ったようです。

西原間切翁長村出身の比嘉春潮は、明治中ごろに自ら体験したことを『翁長旧事談』にまと

めました。その中で天然痘が流行ったときのことを次のように記しています。天然痘がはやり始めると村(翁長)の人々は不安になり、家々では「風気返し(悪疫除け)」、村では「島クサラシ」という御願を行った。また、村の役職者が各家を回り、病人の

イメージ図



島クサラシの様子

有無を調べ、「風気検め」や、井戸を監視する「井戸番」という人置いたと記しています。

一九〇八年(明治四十一)七月十五日付の琉球新報には、「西原村の天然痘隔離所を閉鎖する」とあり、天然痘患者を隔離し、感染拡大を防いでいたことが分かります。

いつの時代でもヤナカジにからまないよう、様々な対策が取られていたようです。これから冬本番を迎えますが、私たちも十分な予防策を考えなければなりませんね！

※島クサラシ

疫病や悪霊が集落に入らないよう、その出入り口に左縄を張る行事。縄には動物の骨などをつるす。